

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：12501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580091

研究課題名(和文)参加者の言語的文化的多様性を前提とした共同授業に関する縦断的研究

研究課題名(英文) Longitudinal Research on Collaborative Learning in a Multilingual and Multicultural Classroom Environment

研究代表者

吉野 文 (YOSHINO, AYA)

千葉大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：10261885

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、言語的文化的に多様な学生を対象に、日本文化・日本社会をテーマに行われる学部段階の教養科目を取り上げ、教員による協働学習の場の構築、参加者の認知的変容、関係構築のプロセスを明らかにすることを目的とした。日本語のみで行う授業、日本語・英語を併用する授業計4科目で学期中に複数回グループ活動の談話を収集し、関連するデータとともに分析した。学生が授業のテーマ、他者、自分自身に対する多様な視点に気づいていく過程(認知的変容)を明らかにするとともに、言語的マイノリティとなって対等に参加できない葛藤を経験することで多角的な視点を獲得できる可能性を指摘した。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed at clarifying three processes taking place in liberal arts courses that dealt with topics related to Japanese culture and society, and that specifically targeted undergraduate students of multicultural and multilingual backgrounds: the process of building collaborative learning environments, the ensuing process of change of awareness among students, and the related process of relationship-building between students. We recorded and analyzed student group conversations throughout the semester, in four courses, which were held either in Japanese or in Japanese and in English. Our findings clarified the possibilities offered to students to acquire multiple perspectives, not only about each course's content, but about themselves and others too. The project also identified conflicts arising from the existence (even situational) of linguistic minorities, and illustrated the multilateral awareness that stemmed from participation in such conflicts among students.

研究分野：日本語教育学

キーワード：協働学習 二言語併用 異文化間コミュニケーション 対話 座談

1. 研究開始当初の背景

(1)参加者の言語的文化的多様性を前提とした共同授業

留学生と日本人大学生を意図的に混在させ、言語的文化的背景の異なる両者が共に学び合う場を提供する大学授業は、留学生受入れ30万人計画のもと、留学生教育や日本語教育の枠組みにおいて、増加するとともに多様化してきている。日本語、英語のいずれかを媒介語とする授業に加え、日英二言語を媒介語とする試みも見られる。

一方、グローバル化が急速に進む中、学生のグローバル対応力や高等教育の国際競争力を強化するための施策が推し進められているのは周知のとおりである。グローバル人材には「語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」(グローバル人材育成推進会議2012)や「我が国の歴史や文化に関する知識や認識、多元的な文化の受容性」(中央教育審議会2012)等が必要だとされており、高等教育ではこうした目標を意図した実践が様々な形で行われ、研究課題としても広く認識されるようになってきている。

こうした背景を考えると、本研究の主題である留学生と日本人学生の共同授業、すなわち言語的文化的背景の異なる学生が学び合う授業は、大学教育において重要な役割を果たしうるものと位置づけることができる。

(2)共同授業に関する研究

共同授業に関しては、これまでも教育的意義、効果が指摘され、授業設計の検討が行われてきたが、課題解決型のプロジェクトが組み込まれた授業や異文化間コミュニケーションに焦点を当てた授業が対象となることが多いという状況が見られた。また、研究方法として、参加者のコメントシートやジャーナル、あるいは教員によるインタビュー、アンケート、参与観察に基づく分析・考察が主流であったと言える。

グループワークにおける相互交渉を文字化した談話資料に基づいて分析した研究としては、参加者間の非対称性や参加者の自己変容に焦点を当てた研究があったものの、教員による場の構築、参加者個人の認知、参加者同士の関係性というように授業全体を総合的に捉える試みや1学期間の縦断的データを扱った研究、英語・日本語の二言語併用授業を対象とする研究はほとんど見られなかった。

本研究の分担者は、一般教養レベルでの共同授業を実践しつつ、参加者の多様性を協働に結び付ける授業方法とその成果について検討してきたが(吉野・西住・和田2013)、従来ブラック・ボックスだったグループ活動の談話を分析し、他のデータと組み合わせることで分析することにより、学習過程の全体像をよ

り精緻に明らかにできるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、総合大学で一般教養科目として開講される共同授業のうち、日本語で行う授業、日英二言語併用による授業の2タイプを取り上げ、協働学習として行われるグループワークの文字化資料、コメントシートやレポートなど学習者の産出する書記データ、教員の授業記録、フォローアップインタビューなどのデータを収集、分析し、参加者の認知的変容および関係構築のプロセスを明らかにすることを目的とした。

授業担当者の専門、授業の目的・内容はそれぞれ異なるが、いずれも協働学習としてグループでの対話が授業に組み込まれており、1学期15週間にわたる授業の連続性の中で参加者個人の認知や関係性がどう変化するか、それが教員の授業の場づくり(仕掛け)とどのように関わるかが分析できるのではないかと考えた。

また、二言語併用授業におけるコミュニケーションの実態を縦断的に分析することにより、参加者の言語使用がどのように変容するかを明らかにすることも目指した。

参加者の言語的文化的背景の多様性を前提とした共同授業が今後ますます増えていくと予想される中、専門の異なる授業担当者が連携、協働しながら行う実践研究は、こうした授業の改善、充実にあって有意義なものと考えた。

3. 研究の方法

(1)研究の対象

研究分担者4名が担当する以下の4つの一般教養レベルの授業を研究対象とした(括弧内は担当者の専門)。Aは日本語のみ、B~Dは日英二言語を併用する授業である。

A「時事から日本を考える」(民俗資料論)

B「異文化交流演習」(語用論・日本語教育)

C「現代日本の宗教と社会」(日本学)

D「バイリンガリズムと言語学習」(教育学)

これらの授業の共通点は以下のとおりである。

「日本」を題材に授業が展開される。

協働学習の理念を生かすグループワークを取り入れている。

比較的少人数のクラスで15回にわたって授業を行う。

日本語を母語とする学生と日本語以外を母語とする学生が参加している。教室内の言語は、授業によって「日本語のみ」または「日本語と英語」が用いられる。

(2)データの収集

分析の中心となるグループワークの談話は、平成26年度はA~Dの各授業で2回~6回にわたって録音・録画を行い、分析に適した部分を選定して、のべ12組のデータを文

字化した。また平成 27 年度は授業 B で 5 回にわたって録音・録画を行い、2 組のデータを文字化した。

また、一部の授業では、参加者を対象としたフォローアップインタビューの実施、文字化、グループワーク以外の講義部分の文字化も行った。

(3)データの分析

本研究が対象とする授業はそれぞれ目的が異なるため、授業担当者が何をどのように学ぶことを目指して授業を計画し、グループワークをどのような場として位置づけたかに留意して分析を進める必要があった。そこで、各授業担当者自身がねらい(仕掛け)を記述しながら、データを繰り返し見て分析を行うこととした。

また、15 回の授業の構成の仕方も授業ごとに異なったため、授業によって、学期中盤の 1 回の授業に焦点を当てて詳細にデータを分析する方法と縦断的に収集した複数回の談話データを考察の対象とする方法のいずれかを採用した。

4. 研究成果

本研究の主な成果は以下のようにまとめることができる。

(1)教員による場づくり(仕掛け)と認知的変容

授業 A : 「座談」という仕掛け

新聞記事をもとに「討論」を行う授業はしばしば行われるが、授業 A では学生によって立場や考えが違うことが想定される題材を取り上げる場合、「討論」を行う前段階の協働学習として「座談」という談話形式が有効であることを検証した。テーマに関する知識の整理を行う講義を受けた後、3~4 名のグループで教員の提示したトピックについて話し合うのが「座談」である。「座談」は、事前に論点について準備をして臨むものではなく、話しながら考え、相手の話を聞きながら気づきを深めることを目指す仕掛けである。

本授業の「座談」の談話データからは、学生同士が問いかけと説明を繰り返す様子が観察された。認識を共有しながら、相手の知らないこと、自分の知らないことが意識化され、お互いに感情的になることなく、何が問題かを認識するに至るプロセスが確認できた。

授業 B : 「座談のコミュニケーションに関する省察」という仕掛け

授業 B は日本文化を題材に異文化比較を行うことで自文化・他文化に対する気づきを深める目的で行われ、授業形式として「座談」を用いている。二言語併用授業のため参加者の日本語力、英語力が多様で、「座談」への参加には場に適したコミュニケーション力が必要となる。そこで、担当教員は学期中盤にそれまでの座談でのコミュニケーション

を個人およびグループで省察する授業を組み入れている。

「座談」の談話データ、フォローアップインタビュー、各授業後のコメントペーパーの分析を通して、省察を行う授業が学生の言語使用、相互交渉に対する気づきを促し、葛藤を経ながら自分なりのコミュニケーション・ストラテジーを探っていく出発点となっていることがわかった。

授業 C : 「協働論証」という仕掛け

授業 C は、一般教養のレベルの宗教の授業ではなく社会の様々な「場」において宗教がどのように表現され使われているかを教えるべきである、また、宗教について知識を与えた上で現実世界には多様な視点が存在することを教えるべきであるという立場から授業を組み立て、「協働論証」を取り入れる意義を検証した。ここでの「協働論証」は一つのテーマに関して学習した後、賛成派と反対派が行うであろう議論を考え、学生が二つの派に分かれてディスカッションを行うものである。

「協働論証」において学生の意見が協働で構築されるプロセスを分析した結果、宗教と社会をめぐる問題の本質が理解されていたことが検証できた。また、宗教を巡る多様な視点を知る意義は、自分の意見がどう位置づけるかを知ることに関わり、一人の学生の発言・レポートの分析から、「協働論証」の経験を通じて自分の認識が他者にどのように受け取られるか、相手の視点を理解しなければ自分の意見が正しく理解されないという、より普遍的な学びが起こる可能性が示唆された。

授業 D : 「言語的マイノリティ・マジョリティという観点の交差」という仕掛け

授業 D は、バイリンガリズムと言語学習に関する言語学的・教育的・政治的課題を理解し、培った知識を、グループワークを通して応用することが目標であった。英語母語話者 1 名と日本語母語話者 8 名という参加者の構成に対応し、教員は授業における英語使用を徐々に減らし、日本語の比重を徐々に増やすという調整を行っていた。

学期後半に行われたプレゼンテーションとその準備としてのグループワークの談話を比較した結果、グループワークにおいて論点を創出した者(英語話者)とプレゼンテーションの場面での主たる発表者(日本語話者)が異なることがわかり、プレゼンテーションだけを評価の対象とすると、グループにおける貢献を取り込めない可能性があることが示唆された。フォローアップインタビューからは、日本語を十分に理解しない英語母語話者(言語的マイノリティ)と日本語母語話者(言語的マジョリティ)のグループワークにおける葛藤や気づきが明らかになった。

(2)二言語併用場面におけるコミュニケーション

ヨン

日本語のみを用いた授業 A では、日本語非母語話者が全員上級レベルの日本語能力を有していたことから、日本語の意味の伝達に問題が起こることはなかった。

一方、日英二言語を併用した授業 B、C、D では、日本語母語話者、英語母語話者、日本語・英語以外を母語とする話者が混在し、それぞれの英語能力、日本語能力も異なることから、教室における言語使用が学生、教員の中で問題として意識されていた。授業 C では学生らによる「ゆっくり話す」「全員に話す機会を与える」「できるだけ相手が話しやすい言語を使う」「複雑な言葉は必ず訳す」というルール作りが試みられ、授業 D では「X語ができない」というラベル付けを避けながら学生同士の言語的調整を促す教員の言葉かけに工夫がなされていた。

授業 B では、前述のように言語の問題を焦点化する授業が試みられている。B に関しては縦断的なケーススタディのほかにも、グループ全員(4名)の二言語の使用実態を調べ、言語の切り替えがどのような機能を果たしているかを調べる試み(吉野・西住, 2015)も行った。

二言語併用の授業では、参加者の言語能力の組み合わせが多様であることから、ケーススタディをさらに積み重ねて分析を進める必要があるが、自己や他者の言語能力、場の状況に合わせて言語を使い分ける能力という観点から考察を進めることができるのではないかと考えられる(Nishizumi, 2016)。

(3)協働学習に関する考察

本研究の結果から、合同で行う授業(共同授業)における協働学習は、まず授業の内容・目的に合わせて設計することが重要であると指摘できる。

また、協働学習を組み入れる際には、次のような視点からその位置づけを考える必要がある。

学生間の対話のプロセスを重視する学習形態を表すものとして捉える。

知識、言語、経験など参加者の多様性・差異を肯定的に捉え、互惠性の観点から活用することを目指す。

多様性・差異から学習過程において葛藤が生じることも意味があると捉える。

上記2点目の「互惠性」と3点目の「葛藤」は、いずれも学習の動機づけや参加者の情意面にも結びつく要素である。現実世界でも経験する可能性のある「葛藤」をチャレンジと捉える態度、「葛藤」を克服して対話を維持し、対話の相手に積極的に働きかける姿勢は、グローバル社会を生きる上で必要不可欠な要素である。

「データの分析」で述べたように、本研究では授業の目的・内容に即した分析を優先させたため、参加者間の関係性が学期を通してどのように変化したかを具体的に記述する

ことはできなかったが、協働学習を通して参加者間でどのような関係性を結ぶべきか、またそのための課題や仕掛けはどうあるべきかを考えることは今後の課題である。

(4)得られた成果の位置づけとインパクトおよび今後の展望

本研究は、グループワークの談話を分析し、フォローアップインタビューやコメントシート、レポートなどと重ね合わせて分析することによって、どのような認知的変容が起こっているのかを明らかにすることを目指した点、また、二言語併用授業におけるグループワークを取り上げた点で協働学習の研究に一定の貢献を果たすものとする。

これまで比較的多く行われてきた言語教育、コミュニケーションを専門とする教員による授業とは異なり、それぞれの授業の内容・目的と関わらせた協働学習の意義を確認できたと同時に、ファシリテーターとしての教員の役割の重要性についても示唆を得た。

今後は、本研究で得られた知見をもとに複言語使用場面である二言語併用授業において必要なコミュニケーション能力はどのようなものか、またそのコミュニケーション能力に配慮しながらどのように場づくりをすればよいかを明らかにすることが一つの大きな課題になるとと思われる。

参考文献

- グローバル人材育成推進会議(2012)『グローバル人材育成戦略(グローバル人材育成推進会議審議まとめ)』
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>(2015年2月21日閲覧)
中央教育審議会(2012)『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)』文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/index.htm(2015年2月21日閲覧)
吉野文・西住奏子・和田健(2013)「共同教育における『座談』の展開—知の枠組みを問い直す大学授業—」千葉大学国際教育センター編『国際教育』第6号, pp.1-27

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

- ガイタニデイスヤニス、小林聡子、西住奏子、和田健、吉野文、「日本」を題材とした協働学習の仕掛け 教養教育における実践から考える、国際教育、査読無、第9号、2016、pp.1-73、
http://mitizane.11.chiba-u.jp/metadb/up/SB00228823/9_001-073.pdf
和田健、「気づき」を記述すること 協同

学習としての「座談」と「書くこと」に関する覚書、国際教育、査読無、第8号、2015、pp.1-18、

http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/SB00228823/8_1-18.pdf

吉野文、西住奏子、「二言語併用ゼミ」の場面における参加者の言語使用 座談の分析に関する一試論、国際教育、査読無、第8号、2015、pp.35-50、

http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/SB00228823/8_35-50.pdf

〔学会発表〕(計6件)

西住奏子、吉野文、協働学習に向けた教員の間作り 「靖国問題」に関する講義の分析、2016年日本語教育国際研究大会(インドネシア) 2016年9月9日~10日、バリ(インドネシア)

Nishizumi, K. "Code-switching as a resource of multilingual interactional competence: a case study from a course in liberal arts", The European Second Language Association (EuroSLA), 25 - 27 August 2016, Jyväskylä (Finland)

Gaitanidis, I. "Japanese Studies as a Liberal Arts subject: Area Studies and Cosmopolitanism in Japanese higher education. British Association of Japanese Studies (Japan Branch), 29-31 July 2016, Hokkaido University (Sapporo-shi, Hokkaido)

Gaitanidis, I. & Shao-Kobayashi, S. "De-Racializing Japaneseness: A Collaborative Approach to Shifting Interpretation and Representation of "Culture" at a University in Japan.", Comparative and International Education Society 2016 Conference in Vancouver, 10 March 2016, Vancouver (Canada)

西住奏子、吉野文、日英二言語併用科目における留学生の言語運用の変容 初中級レベルの日本語学習者の座談の分析、日本語教育学会 2015年度第8回日本語教育学会研究集会(東北地区)、2015年11月21日、秋田大学(秋田県・秋田市)

吉野文、和田健、西住奏子、小林聡子、ガイタニディスヤニス、「日本」を題材とした協働学習の仕掛け、第20回大学教育研究フォーラム、2015年3月14日、京都大学(京都府・京都市)

〔その他〕

ホームページ等

http://cire-chiba-u.jp/liberal_arts/001462.html

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉野 文 (YOSHINO, Aya)

千葉大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：10261885

(2)研究分担者

西住 奏子 (NISHIZUMI, Kanako)

千葉大学・国際教育センター・講師

研究者番号：40554176

和田 健 (WADA, Ken)

千葉大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：20292486

小林 聡子 (KOBAYASHI, Satoko)

千葉大学・国際教育センター・特任助教

研究者番号：90737701

ガイタニディス ヤニス (GAITANIDIS, Ioannis)

千葉大学・国際教育センター・特任助教

研究者番号：90715856